論文審査の結果の要旨

氏名：天　野　陽　介
博士の専攻分野の名称：博士（文学）
論文題名：曲直瀬道三における中国針灸医学思想の受容と展開
——日本中世針灸史の基礎的研究——

審査委員：（主 査）　教授　舘　野　正　美
（副 査）　教授　青　木　　隆
教授　田　口　一　郎
北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部部長　小　曽　戸　洋

本論文は、日本の針灸医学思想史において未だ殆ど手つかずの状態にあった日本中世針灸史の基礎的研究として、日本医学史上における最重要人物の 1 人である安土桃山時代の医家・曲直瀬道三に注目し、その中国針灸医学思想の受容と展開を、これまで検討されたことのなかった資料を用いて審らかにしようとしたものである。

序論では先行研究の問題点を挙げ、本論文の意義と目的を明確にした。即ち、これまでの日本医学史の研究は、針灸の理論や技術、延いてはその医学思想的背景についての研究が等閑視されてきており、特に安土桃山時代から江戸時代前期の日本針灸医学思想の研究が殆ど手つかずの状態であったことを指摘し、このことについて、当時を代表する医家・曲直瀬道三を中心に中国医学思想の受容と展開の実態を明確にすることは中国針灸医学思想の受容と展開を述べる上で極めて重大な意義があることを明確にしている。

そこで先ず第一章では、これまで仔細に検討されることがなかった、道三編著の『針灸集要』を取り挙げ、道三がいかに中国の針灸思想を受容したかについて論究している。具体的には、先ず数種ある同書の現伝本の書誌学的調査を行ない、次にその内容を検討して、道三の針灸医学思想の形成には、その師・田代三喜の影響が色濃く反映していることを引用文献の解析から明らかにしている。また同書の各論部では総論部と異なり、針灸専門書を引用の基本とはせず、医方書からの引用が主となっていることから、これを道三流の、湯液を中心とした医学において、更に灸を活用できるようにしようとする意図によるものであると指摘し、同書において道三は、中国医学思想を受容し日本的に咀嚼した上で確立した医学体系に、この針灸治療を組み込むことを試みようとしたものである、と結論づけ、安土桃山時代における中国医学思想の受容と日本的展開の一端を明らかにし、かつ同書が日本における総合的針灸専門書の嚆矢であり、同時に道三の医学思想を示す好資料であるとの位置づけを行なっている。

第二章では、安土桃山時代の経穴研究の一例として、未だ研究されたことのない資料である、道三とその門人・秦宗巴との問答書簡『黄帝明堂灸経不審少々』を取り挙げ、その内容を検討している。その結果、当時の経穴研究の実態の一端が、それまでの経穴研究の中心的テキストであった『黄帝明堂灸経』の経穴部位の記述について、諸書を校勘して経穴部位の考定を行なっていることを明らかにしている。またこのような経穴研究が宗巴と道三の問答書簡という形式で行なわれていたことも明らかにしている。

第三章では、国立国会図書館所蔵『新刊黄帝明堂灸経』に見える書入れに着目し、その内容を詳細に検討し、同書入れは第二章で検討した『黄帝明堂灸経不審少々』と同文あるいは類文を多く含んでいることを明らかにし、ここから同書入れは曲直瀬一門の経穴研究と少なからぬ関わりがあると結論づけている。

第四章では、『新刊黄帝明堂灸経鈔』を具に検討している。同書も本論文で初めて取り上げられたものある。その結果、同書には曲直瀬一門の経穴研究が道三・宗巴だけでなく、曲直瀬玄朔・正琳などの学説も含んでいることが明らかになった。同書の伝本は他に知られておらず、その内容も従来知られていなかった。本論文によって同書が曲直瀬一門の『黄帝明堂灸経』研究の精華として刊行されたことが明確になった。また抄物の体裁を取っている同書の内容が明らかになり、曲直瀬一門で行なわれていた『黄帝明堂灸経』の講義、つまり経穴を中心とした中国医学思想についての日本における講説の実態が明らかになった。加えて第二章・第三章で考察した『黄帝明堂灸経不審少々』及び国立国会図書館所蔵『新刊黄帝明堂灸経』の書入れが、この『新刊黄帝明堂灸経鈔』にも含まれていることを指摘し、曲直瀬一門の経穴研究の実態を、上述に続いて、一連の流れの中において多角的に概観し明らかにしている。

以上のように本論文は、我が国における安土桃山時代から江戸時代前期における中国針灸医学思想の受容と展開について、これまで十分に検討されてこなかった諸文献の研究を通じて明らかにするものであり、高く評価できる内容である。

よって本論文は，博士（文学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以　　上

平成２７年　１月２２日